

## 書評

主編 陳治安 劉家榮 文旭  
『語用論：言語理解、社会文化と外国語教育』  
(第6回中国語用論シンポジウム論文集)  
(中国西南師範大学出版社 2000年11月 436ページ)

評者 余 維

言語理解、社会文化と外国語教育をテーマとする第6回中国語用論シンポジウムが1999年7月に中国西南師範大学で開かれ、本論文集は総論、一般語用論、対照語用論、認知語用論、社会語用論、応用語用論、語用論と他分野間の研究7分野から成る計49篇の論文によって構成され、今の中国語用論研究の研究成果と現状を示すものである。

### 1. 総論 (3篇)

「中国語用論研究の20年」(文旭)は、中国語用論研究の歴史を振り返って、これまでの研究成果を総括している。そして、中国の語用論研究は海外の理論を導入するとともに、中国語自身の研究に立脚し、自己の理論を創り、ミクロとマクロの研究を互いに関連させ、語用論理論の応用研究を強化すべきだと強調した。

「語用論の哲学的ルーツ」(錢冠連)は、3つの事例によって中国が語用論導入の当初にどのように哲学的な考え方を処置したかを詳しく説明している。哲学は言語学と密接な関係があり、また、多くの語用論の概念も言語哲学から由来しているので、哲学の側面からの語用論研究は非常に価値があると述べている。

「(語用論研究における)経済学分析手法の可能性」(向明友)は、経済学と語用論を結びつけ、経済学の研究方法を語用論研究に応用したもので、言わば、経済学分析語用論(Econopragmatics)とでも言うべくものである。大変ユニークで、新たな視点と研究方法を示してくれた。

### 2. 一般語用論 (11篇)

一般語用論は語用論研究の基本である。直示、推意、前提、言語行為の他に、本論集はまた他の語用論的現象にも及んでいる。

「語用の曖昧さについての再考」(何自然)は、語用論と認知論、特に関連性理論の最新成果を生かして、語用の曖昧さについて詳細な検証を行った。

「直示の語用論的な位置付けと使用法則」(周流溪)は、中国語、特に古代漢語の直示及びその使用法則をめぐって探っている。中国語の直示詞は大変豊富で、複雑でもあり、語用論研究の良い素材である。そのため、十分に検討する価値があると指摘した。

「前提の語用論研究概観」(陳治安・緒修偉)は、Strawson 以来の前提についての語用論研究を分析批評し、前提に関して包括すべきカテゴリーを論証したうえ、その本質的特徴を総括したもので、前提の研究にかなり参考になる。

「沈黙についての語用論機能」(趙彩香)は、言語、文化、心理的な視点から、沈黙について、その機能を検証した。言語研究の際に沈黙の機能を見落とすべきではなく、沈黙は、発話の補充と見なすべきであると指摘した。

### 3. 対照語用論研究 (3 篇)

「英中対照語用論緒論」(陳治安・文旭)は、英中対照語用論について、その構築理論の基礎、学科の性質、対照の原則と方法、研究内容と意義を詳細に論じている。英中対照語用論の研究は、語用論、対照言語学、異文化コミュニケーションの基礎理論を充実するばかりではなく、言語研究と教育、翻訳学及び修辞学の発展にも寄与できる。

### 4. 認知言語学 (6 篇)

「言語使用中の自我と超自我」(熊学亮)は、上海地域の言語使用者に関して、その社会的敏感な話題の関わり方について統計的調査を行っている。社会的発話の場面においては、抽象的な文化意識要因が含まれ、発話に対して微妙ながらも強い制約をもたらすことができると指摘した。

「語用論理論と語用論的制約の認知的心理的根拠」(冉永平)は、言語コミュニケーションの認知語用観を論じた。言語コミュニケーションの過程は、双方が認知発話場面へ仮に参入する過程である。成功のコミュニケーションは、絶えず認知発話場面对して仮の過程が参入し、調整或いは選択したものである。

「反語文の認知基準について」(曾衍桃)は、認知語用論の視点から反語文の認知メカニズムと認知過程を分析した。Grice、Sperber & Wilson、Clark & Gerrig などの語用論学者が反語文理解のメカニズムについての仮説を詳しく分析してから、それらの仮説の不足を指摘し、反語文理解に3つのメカニズム仮説を独自に打ち出した。

## 5. 社会語用論と異文化語用論 (12 篇)

社会語用論 (social pragmatics)、異文化語用論 (cross-cultural pragmatics)、文化語用論 (cultural pragmatics) などはマクロ語用論のカテゴリーに属するものであるが、その研究は近年以来ますます盛んになっている。

「中国における言語コード転換の語用論分析—順応分析法」(于国棟)は、Verschuieren の「順応理論」を応用して、中国における言語コード転換の問題を詳しく分析している。言語コード転換は言語接触によって発生した自然言語異変である。この言語現象に関しては、言語体系と言語使用者に任せて自然な成り行きに決めさせるべきであると主張した。

「国際交流における発話の3分類—仮説と検証」(胡庚申)は、国際交流の発話場面を日常コミュニケーション、専門分野の交流と商談交渉の3つのタイプに分類し、定性、定量と実践解釈の方法でその仮説に分析検証した。国際交流の「発話場面3分類」の確立は、発話場面の研究の深めることに、特にますます盛んになる国際交流における語用論研究に重要な意義をもたらすことであろう。

## 6. 応用語用論 (6 篇)

「語用の転移と外国語教育」(武波)は、理論上から語用の転移の必要性及び初歩的な枠組みを打ち出した。語用転移の研究は外国語習得理論のために新たな根拠を提供することができ、特に応用言語学の領域においては、語用論の威力を発揮させることができる。

「英語語彙テストにおける語用論問題」(張権)は、大量のデータを使って、英語語彙テストにおける語用論問題を集中的に議論した。語彙テスト時、発話場面の設定においては、情報が過不足或いは過剰の2点に気をつけるべきであるとしている。

## 7. 語用論と他分野間の研究 (8 篇)

語用論自身が分野を越える性質を持ち、言語学と他の人文科学、社会科学の絆的な存在でもある。

「語用論と機能言語学の関係」(陳治安・王電建)は、詳細な対照分析を通して、語用論と機能言語学の繋がりと相互補充性を探り、互いの関係に理論根拠を提供した。

「レトリック効果と発話の場面」(何剛)は、「語用の修辞学」という概念を打ち出した。発話のレトリック効果はコミュニケーション効果のみならず、また道徳的、美学的など多くの発話効果も含まれている。レトリックと語用論の間に高度な統一性が

## 余 維

存在している。語用論の理論と方法は修辞学の解釈をより徹底的に、より科学的にさせることができ、しかもより操作可能にしてくれる。

もちろん、本論文集は第6回中国語用論シンポジウムの部分的内容であって、まだ取り上げていない問題も多い。例えば、形式語用論の研究はまだほとんど空白なので、束定芳博士が大会での形式語用論の研究を強化する提案に対して、参加者の強い関心と討論を引き起こした。

以上のように、本論文集は、最近中国語用論研究の研究成果の一部分と現状を示すものである。